

No. 63

2016. 4

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談
鷹羽狩行(俳人)



佐竹美保《サグとナユグー混じり合う世界—》2016年
(「上橋菜穂子とく精霊の守り人」展)出品)

収蔵品のご紹介 「驚きの肉筆原稿出現——中野重治の転向連作と鷗外論」 林 淑 美

追悼・佐伯彰一名誉館長

館長の作家対談

ゲスト
鷹羽狩行
(俳人)聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

長年にわたる俳人としての業績で2015(平成27)年に芸術院賞を受賞された鷹羽狩行さんをお招きし、当館館長がお話を伺いました。

俳句ブームから「俳句の時代」へ

菅野▼鷹羽さんは俳句歴が随分長いと思います
が、いつごろから俳句をたしなまれているの
ですか。

鷹羽▼私の句歴も70年になりました。

菅野▼敗戦と同時に始まったということですね。
鷹羽▼はい。戦後、勤労働員から学校(尾道商
業高校)に戻りましたら、全校生徒に呼びかけて
俳句の募集があり、校内俳句雑誌「銀河」が出ま
した。それに一句入選したのが、きっかけで70年
続いています。

菅野▼学校の行事がきっかけになったんですか。
鷹羽▼そうですね。勤労働員の時の体験を詠
んだへ稲刈りの進め進む蛭かなという句で
した。

菅野▼「蛭」は季題にあるわけですね。

鷹羽▼はい、秋の季語です。その時の先生の自
宅で、山口誓子の句集『激浪』と秋元不死男の『現
代俳句の出発』を借りて読みまして、その後この
2人が私の俳句の師ということになりました。

菅野▼私は大学生のころ、山口誓子の句(学問
のさびしさに堪へ炭をつぐ)を知りました。こう
いうことも俳句で表現できるのかと、俳句の表現
する対象領域にこういうことがあるのかと思っ
たのを覚えています。あの作は、随分古いですね。
鷹羽▼大正時代の句ですから。

菅野▼ただ、そのときに一つ滑稽なことがあっ
て。私はひらがなの「さびしさ」の「さ」を「き」と
間違えて読んでしまったんです。「学問のきびし
さに耐え」と(笑)。

鷹羽▼それでも通じますが説明的、報告的な感

じになりますね。

菅野▼そうですね。それから、人生そのも
のに触れうるということと、ちよつと違ってきた
ですね。でも、それはすぐに分かった、「さびしさ
だ」というふうに読み直しましたけどね。

鷹羽▼今の若い人には「炭」が分からない(笑)。
時代と共にだんだん季語も忘れられてゆくとこ
ろがありますね。

菅野▼使わないものは分からなくなってくるで
しょうね。季語というのは、大体どのくらいある
ものですか。

鷹羽▼大歳時記ですと1万5千ぐらいでしょ
うか。主要季語ですと、春が800、夏が千200、
秋が800、冬が800で、それに新年が400
あり、全体で4千くらいになります。

菅野▼でも、近ごろのようにどんどん季節の感

鷹羽▼そうですね。一番多いのはブラジルから。例
えば、こういう句がありました。へ掛乞も国広け
れば飛行機で――「掛乞」は掛売代金を取り立
てること。ブラジルでの俳句大会に出かけた時
に、いろいろ見物できると思っていました。イグア
スの滝、アマゾン川、広大なコーヒー園や牧場……
そうしましたら、日本の国土の23倍。どこへ行く
にも飛行機で行かなければいけない。この句はや
はり旅行者ではできない句です。

菅野▼しかし、その方は掛乞が季語ということ
をもちろんご存じなわけですね。俳句のことに
随分通じていらっしゃる。
鷹羽▼今は、掛乞という句は国内でも作りませ
ん。江戸時代の人情話の世界みたいで。
菅野▼僕は知りませんから。

鷹羽▼日本では俳句ブームが起きました、昭和
30年代から半世紀ほど続きまして、ピークのと
き、俳句人口は2千万人とも言われました。
菅野▼俳句ブームのきっかけはどんなことでし
たか。
鷹羽▼家庭電化製品の普及で余暇のできた主婦
の参加から始まるんです。
菅野▼なるほど。
鷹羽▼折からカルチャーセンターがあちこちにで
きました。

菅野▼乱立したような感じですね。
鷹羽▼はい。昭和48年のオイルショックのときに
は、やはり定年を迎えた人たちが自分の生きてい
る証を残したいと俳句の道に多く入ってこられ
て。また昭和60年ごろから俳句の国際化が始ま
り、平成元年12月には国際俳句交流協会が設立
されました。やがて俳句ブームが「俳句の時代」
になったというわけです。
菅野▼それは落ち着いてきたかもしれないわけ

です。
鷹羽▼そうですね。平成14年には、日本語ブーム
もあり、俳句や短歌は美しい日本語を守る最後
の砦であるかのように言われました。
菅野▼長い間洗練されてきた中でずつと残って
きた言葉ですから、美しい日本語の代表というの
は確かなことでしょうね。

俳句は瞬間を永遠のものにする

菅野▼話が戻りますが、国際俳句交流協会には
何力国ぐらい加盟しているんですか。

鷹羽▼30カ国ですが、50カ国で200万人が母
国語で俳句を作っていると言われていました。その
場合の俳句というのは、世界で一番短い3行詩と
いうことで、季語が入っていないんです。

菅野▼季語というのは日本独特のものかもしれ
ませんね。

鷹羽▼そうですね。

菅野▼日本人の季節の感覚から生まれたもの
で、『古今和歌集』あたりから決まってくるわけ
ですね。詠む題が有明けの月とか、秋の暮れが一
番寂しいとか、歴史的に連綿と続いて洗練されて
きている。そういう日本人の季節感覚と結び付
いて作られてきたもので、例えば僕が多少知って
いる外国語はフランス語ですが、フランス人の季
節感覚はもちろんあります。だが、随分違います
ね、我々とは。

鷹羽▼違いますね。

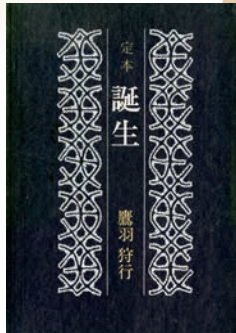
菅野▼秋の暮れが寂しいとは恐らく感じないの
と、四季がそれほど自分たちの生活と結び付いて
感情豊かにするという意識はないですね。あつ
たにしても非常に希薄であると思いますから、外
国で作る俳句に季語を求めるのは無理がどうし
てもあるでしょう。



鷹羽狩行(たかは・しゅぎょう)

俳人。1930(昭和5)年、山形県生まれ。少年時代を広島県尾道市で過ごす。山口誓子、秋元不死男に師事。「天狼」「氷海」同人を経て、1978年「狩」を創刊、主宰。古典を現代に生かし、新しい伝統を生み出す俳句を追求する。

1966年、第1句集『誕生』で俳人協会賞受賞。以降、『平遠』(芸術選奨文部大臣新人賞)・『十三星』『翼灯集』(毎日芸術賞)・『十五峯』(蛇笏賞・詩歌文学館賞)のほか、評論集、随筆集、入門書など著書多数。毎日俳壇・NHK全国俳句大会などの俳句選者。公益社団法人俳人協会会長、公益社団法人日本文藝家協会常務理事、日本現代詩歌文学館振興会副会長、国際俳句交流協会顧問、日本藝術院会員。

「狩」
2016年3月号句集『十七恩』
2013年 角川書店『新装版 鷹羽狩行自選自解句集』
2007年 講談社第1句集『定本 誕生』
1976年 牧羊社

鷹羽▼むずかしいですね。私には英訳句集が2冊ありますが、これは別物です。

菅野▼そうでしょうね。訳者はご自分ですか。

鷹羽▼いいえ、外国人です。出来上がったものは、どうも私の意図とは違う。

菅野▼これが自分の俳句か、という感じですね。時々、俳句の仏語訳を見ることがあります。言葉の問題として考えるのは、日本語は助詞の「や」「む」「と」などで感情を表現することができますね、配列によって。

鷹羽▼それに、「や」「かな」「けり」という切れ字もありますから。

菅野▼ヨーロッパの言葉では“a”や“in”などの前置詞がそれに当たるわけですが、それでは感情表現はできないんですね。どうしても単語の羅列になりやすい。ですから、俳句の翻訳はそこがとても難しいだろうと思いますね。

鷹羽▼フランス語の場合は韻を踏むんじゃないですか。

菅野▼伝統的なフランス詩はもちろん踏みますが、現在は自由詩で押韻はむしろ例外的でしょうね。フランス語で俳句となると、韻を踏むのは不可能だと思います。話は変わりますが、フランスの詩人で俳句を高く評価して、自分たちの詩の参考になるという人は随分います。例えば、こういうことを言う詩人がいます。ある一つの単語は宝石と同じで、角度を変えるといろいろな光が出てくる。語法を工夫することで違った意味合いが出てくる。俳句の場合は、具体的な物をまず出すわけですが、それで終わらないで、語と語との関係によって、あるいは語に内在する比喩的な意味によって、さまざまな新しい光が出てくるという議論ですね。そういうところが参考になるらしいです。それに関連しま

すが、現在フランスで一番傑出していると思うイヴ・ボヌワフという詩人がいますが、芭蕉のことを論じている本があるんです。

鷹羽▼芭蕉ですか？

菅野▼その中でなかなか面白いことを言うなと思ったのは、俳句というのは「瞬間の形而上学」だと言っています。一瞬の間に、非常に形而上的なものを表現できる形式だと。それに比べて、フランスの詩人はまず概念化することから始めるというんですね。木なら木を見て、しかしこの木はどういう木であるかということを概念として捉える。そこから詩を組み立てていくという言い方をするんです。一方、日本人の場合はどうか。芭蕉を取り上げて、へ菊の後大根の外更になし」という句ですが、まず具体的な物を提示し、それを通して「瞬にして暗示的に高次なものを表現する違いがあるというのが、彼の俳句論の要旨です。

鷹羽▼俳句でも、やはり現実を踏まえる。俳句は瞬間を永遠のものにする、そういう素晴らしい働きがあると思うんですけど、あるとよく言っているのですが。

菅野▼結局、そういうことを言いたいんですね。

鷹羽▼私の句で海外俳句の草分けのように言われているのがへ摩天楼より新緑がパセリほど。

菅野▼小さく見え

です。私としては、この「返り花」というのが俳句ではないかと。

菅野▼いつごろの作ですか。

鷹羽▼平成7年です。歳時記の「返り花」の解説には、季節外れに咲く初冬の花で、少し小ぶり

でどこかわびしく

といったことが書いてあります。ところが、この句では、

生き生きとして誇

らしげではありませんか。暗さがないですね。そういう季語の見直しをしているわけです。北京へ

行きました時にへ春暁の自転車五つ六つ百」という句を作りました。

菅野▼六つから百へ飛ぶところがいいですね。

鷹羽▼ありがとうございます。その大群は今では車社会に一変、排気ガスによる大気汚染が大きな問題になっている。そうすると、俳句は、生活、風俗、文化の役割を果たしているのではないかと。

菅野▼歳時記もそうですね。歳時記の移り変わりで、日本人のいろいろな情緒の変遷というのか、もつと言えば精神史がたどれる面は恐らくあると思いますね。

鷹羽▼ありますね。俳句専門になって選句の数が、月に三万になりました。

菅野▼ということは1日に千句でしょう。一句を選ぶのに1分かかるとして、1時間に六十句ですね。そうすると、10時間やっても六百、どの

ると。摩天楼というのは何メートルぐらいあるんですか、高さは。

鷹羽▼830メートルぐらいで、102階です。

昭和44年にアメリカへ1ヵ月ほど、会社の出張で回ったんですが、かたわら俳句もメモしながら。そこでは「や」「かな」「けり」を使う俳句が、剃刀の刃のように弱く感じられ、なんとか短刀のような威力を発揮してくれないかと思いついて。尺貫法「や」「かな」「けり」ではなくて、メートル法で考えながら作りました。

菅野▼普段の俳句、日本でお作りになる俳句より構成的にするということはあるでしょうね。

鷹羽▼あります。

菅野▼そうしないと、なかなか異国の風物は捉えられないということでしょうね。

鷹羽▼そうですね。

菅野▼今のお話を伺っていて、「パセリ」というのはそのときに下を見て直感的に、パセリだなとなるんですか。それとも後から想像して、記憶でパセリが出てくるんですか。

鷹羽▼海外で俳句を作る場合、一句にこだわっていたら時間が過ぎ、風景が変わるばかり、そこで何がポイントになるか。摩天楼の上で「パセリほど」という言葉がひらめいたら、それを句帳に書いて、次の風景とか対象に向かうということになります。

菅野▼そのときは、「パセリほど」と、とにかくつかまえたわけですね。

ように選句をされたのか(笑)。

鷹羽▼そんなにかかりませんよ(笑)。だいたい五百句を30分のスピードですから、1日に1時間で千句ずつということになります。一句がひとかたまりで目に飛び込んでくるという感じです。もちろん、添削しながらですが。十日間のヨーロッパへ出掛けるときなどは、一万句をスーツケースに入れて行きました。

菅野▼お作りになった句はどのくらいありますか。数えたことはありますか。

鷹羽▼今、全集を作っているのですが、もちろん一万句は突破しております。

菅野▼捨てられたというか未発表のものもありでしょう。

鷹羽▼ありますね。句集には、初版本と推敲し出した定本とがあります。全集には、私としては定本だけにしてほしいと言ったのですが、出版社としては作者の歴史を知る上で初版本が一番重要だということで、いま両方を収めるようにやっているところですよ。

菅野▼それは大事なことです。研究家にとっては、最初からどういうふうに変わってきたのか生成の過程を見ていきたいですから。今日は本当にお忙しいところを長い時間ありがとうございます。

鷹羽▼ありがとうございました。

(2016年2月3日 世田谷文学館館長室にて)



へ人の世に花を絶やさず返り花へ

菅野▼鷹羽さんは基本的には有季定型派ですね。ただ、句まがりは多い印象を受けます。

鷹羽▼よくご存じで(笑)。私の名前は高橋行雄です。山口誓子の命名で、句まがりになっているんですね。「鷹羽」で切つて「狩行」になっている。その俳号のせいだと言われるぐらい、句まがりの句が多いんです。

菅野▼句まがりの句ができたときに直そうとか、そういうことはないんですか。

鷹羽▼例えば、私の句にへ落椿われならば急流へ落つゝがあります。これは五・七・五ですが、句まがりになっている上五、中七、下五といいますが、中七から下五にかけて句まがりになっている。「急流」というところが、中七と下五に分かれているんです。句まがりになっているところは、そこを2回読むことになります。俳句は五・七・五ですから、「落椿われならば急」そして「流に落つ」と、あれ？と思つて「急流」をもう一回読み直す。そういう要になる言葉が句まがりになっていることが理想だと言つてきて

資料受贈報告

2015年10月11日〜2016年2月19日

▼稲垣信子様 尾花仙朔様 鶴岡善久様 布川鴉様 水尾和子様 宮崎潤一様 柳生じゅん子様 安田素子様 和田安弘様

▼アジア文化社 一茶記念館 愛媛人物博物館 かごしま近代文学館 神奈川県立近代美術館 北九州市立文学館 こおりやま文学の森資料館 さいたま文学館 坂の上の雲ミュージアム 佐佐木信綱研究会 サトエ記念21世紀美術館 石神井公園ふるさと文化館 杉並区立郷土博物館 杉並区立西荻図書館 鈴鹿市文化振興部 芹沢光治良文学愛好会 川内まごころ文学館 沖積舎 鶴岡市立藤沢周平記念館 富山県歌人連盟 白山市観光文化部 文学の森 紅書房 前橋文学館 町田市民文学館 ことばらんど 松本清張記念館 武蔵野ふるさと歴史館 武者小路実篤記念館

▼「あけび」「阿房芋」「宇宙風」「海」「大岡信研究」「海紅」「がいこつ亭」「街道」「風花」「かねこと」「カプリチオ」「寒雷」「橄欖」「空想カフェ」「くさくさ」「九品仏川柳句会会報」「群系」「芸文あまがさき」「櫻」「原型富山」「現代文学史研究」「鴻」「心の花」「午前」「埼東文学」「山河」「山暦」「春耕」「春燈」「詩霊」「川柳研究」「双鷺」「蠶」「多摩のあゆみ」「タルタ」「短歌人」「丹青」「地中海」「伝書鳩」「同時代」「童話勉強会くになち」「飛火」「白」「風」「プチ★モンド」「麓」「文藝軌道」「本のParking」「窓」「未定」「遊牧」「ゆく春」「ランブル」「りんこの木」「檸檬」の各誌ほかより資料のご寄贈、ご協力いただきました。ありがとうございました。

(五十音順・団体名敬称略)

驚きの肉筆原稿出現——中野重治の転向連作と鷗外論

林 淑美



〈転向〉後の中野重治 1937（昭和12）年

書き始めた中野は、自らの〈転向〉を直視し歴史的相対化のためにいわゆる転向五部作を書く。昨年十月、中野重治のご長女鰐目卯女さんからお電話をいただいた。亢奮して階段から落ちないように、という前置きののち知らされたのが、転向五部作のうちの三つ、「第一章」「鈴木都山 八十島」「小説の書けぬ小説家」と戦時下発表の鷗外論の二つ、それと戦後のエッセイ「悔おかりしわが身かな」の六点を世田谷文学館が受贈予定で預かっているというお話だった。亢奮して……と鰐目さんがおっしゃるのは、二〇一五年の二月開館した福井県立ふるさと文学館を、昨年八月鰐目さんと訪

中野重治には転向五部作と呼ばれる小説群がある。最初に書かれたのは「第一章」で「中央公論」の一九三五年一月号に掲載、二作目が「文藝」一九三五年四月号掲載の「鈴木 都山 八十島」、三つ目に書かれたのが一九三五年五月号の「経済往来」に発表されたあの「村の家」である。このあとに発表されたのが、「改造」掲載の「小説の書けぬ小説家」、「中央公論」掲載の「一つの小さい記録」で、ともに一九三六年一月号であった。

中野重治は、治安維持法違反で二年余の拘禁ののち、一九三四年五月に懲役二年執行猶予五年の判決を受けて出獄した。いわゆる転向である。その後の昭和十年代の文学的豊穡を留意するべく、出獄直後から鋭く重い文学評論・社会時評を

どのように危険であったか、推測するに難くない。二〇一五年十一月三日、鰐目卯女さんと「中野重治の会」の大塚博さんとともに、私は世田谷文学館を訪ねて、学芸員の方の丁寧な案内で肉筆原稿を参観し、すべて中野の手による定稿であることを確認した。よくぞ生きてくれたと、文字通り震える手で触れたのである。鰐目さんは、文学館の、資料の返却を希望するかのお尋ねに対して、文学館の所蔵とすることを許され、資料の出処について訊ねられた。それは私たちのもつともお訊きたいことであつた。伺った内容は、興味深い事実であつた。寄贈されたのは、石井耕氏、石井牧氏、平賀美穂氏のお三人、筑摩書房の元編集者石井立氏のご遺族であるということであつた。氏は、一九六四年に四十歳の若さで病没されたという。父上の遺品を整理の際出てきたのが中野重治の原稿であり、御一家が居住されていた世田谷の文学館に寄贈することにした、ということである。

一九四八年一月に筑摩書房から刊行された『中野重治選集』Ⅲは「第一章」を主題として転向五部作と「空想家とシナリオ」が収録され「第二章」と「鈴木 都山 八十島」（原稿では「鈴木・都山・八十島」）の二つは、これが初刊であつた。石井立



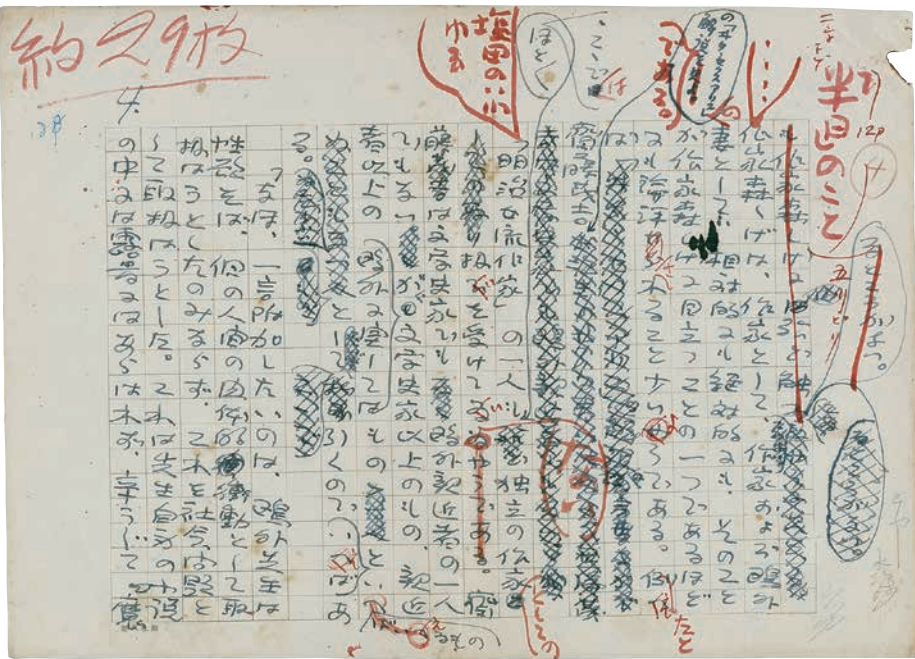
筑摩書房編集者時代の石井立

氏は恐らく、これを担当されたのであろう。また鷗外論の二点「半日」と「（原稿冒頭から三枚欠落）」「鷗外の遺言状」（原稿では「遺言状のこと」）の初刊である「鷗外その側面」が筑摩書房から刊行されたのは一九五二年六月、石井氏はこれも担当されたのであろう。『鷗外その側面』に収められた十五篇の評論のうち戦時下に書かれたものは六篇、原稿の現存が確認されているのは、一九四三年に書かれた四七年九月長谷川書店刊行「森鷗外研究」に収められた「鷗外論目論見のうち」のみである。中野歿後遺された多くの生原稿を、中野重治夫人原泉が石川近代文学館に託したもののなかにある（加えれば石川近代文学館に「半日」のこと」の草稿がある）。

石井氏について、一九六〇年代に刊行された旧版『中野重治全集』の編集を担当した且原純夫が、第二次『中野重治全集』の第二十五巻月報に、旧版全集の編集を担当したのは石井立さんで、第一回の配本の後長期療養に入ったと書いてあるのを読んだ。右のことを確認したく、学芸員の方を煩わせて、石井耕氏に問合わせて頂いた。お答えは、石井立氏は筑摩書房に「昭和二十二年六月入社、在職中死去。とくに、昭和三十四年二月以



中野重治原稿「第一章」



中野重治原稿「半日」のこと

ねた際、文学史の上でも中野重治研究の上でも、とても重要なエッセイ「文学者に就て」について」の定稿原稿があるのを確認したばかりで、その時私はとても亢奮したらしいのである。亢奮の由来は、戦時下の中野の、書簡等を除く肉筆原稿で現存するものは少なく、とりわけ昭和十年代前半のものは全く確認されていないからである。しかも「文学者に就て」についてである。この評論は一九三五年二月号の「行動」掲載であり、転向五部作の最初の三作と執筆時期はほぼ同じ、内容も転向をめぐるもので共通している。このたび世田谷文学館が受贈した定稿原稿は、その重要性の上でも量の上でも、敗戦前のもはもう出ないだろうという、大方の予想するところを大きく裏切ったまことに喜ぶべき出来事だったのである。戦前のものは、時間の経過ということだけでなく、大震災があり戦災・空襲があつたのだから失われることが多く、しかも中野重治の場合、その上に〈中野重治〉のものということがあるのだ。何と言っても、札付きの思想犯だ、治安維持法の被告というのは刑期を了えたからといって放免になるわけではない、一生監視されるのである。中野重治も戦局の拡大とともに権力からの監視は厳重になり、生活も困難を極める、戦時下の日常は誰しもが困難だが、中野の場合は尋常ではない。こうした思想犯の原稿の当人以外の保管が

蔵書を疎開させたのは、中野家の場合敗戦の年の七月になってからであつた。中野重治はこの年六月召集され、長野県の駐屯地にいたから、疎開のために奮闘したのは妻の原泉である。が、そのために夫婦の相談は書簡として文字に残された。これを読むと日用品は郷里の一本田の家へ、蔵書は筑摩書房の古田晃の厚意により信州へ疎開させたと思われるが、原稿類はどちらの荷物に入っていたのだろう。

『中野重治選集』Ⅲの「作者はしがき」に中野重治は「この集の六つの短篇は二つにわけられるかも知れぬ。はじめの五つが一組、のこりの一つが他の一組ということになるう。」とし、元来は「全部が「第一章」にはいるべきものであつた。つまりわたしは、一九二七、八年ごろから三四年ごろ、ここに形となつた「第一章」の書かれるころまでの問題を「第一章」として総括し、第二章、第三章へと続く日本のある流れを書きたかつたのだが「中略」でぎざにしまった。」と書いた。転向五部作と呼ばれるようになったとは、この文章にあるだろうが、この時の「日本のある流れを書きたかつた」という望みは、中野が企てたような形では表われなかつたが、中野は生涯をかけて第二章、第三章へと、あるいは四章、五章へと続く「日本のある流れ」を追求し書き続けたのである。

本稿には、このたび寄贈された、原稿の状況、用紙のこと、書込み他書誌的な情報を報告しなければならぬのだが、紙幅の都合でかなわなかつた。いずれ別稿を留意したい。

（リンシュクミ／立教大学教授）

この資料は、4月23日（土）～9月15日（水）の世田谷文学館コレクション展「作家たちの戦中・戦後」で展示公開いたします。

追悼・佐伯彰一名誉館長

佐伯彰一名誉館長を偲んで

菅野昭正（世田谷文学館館長）

ほぼ60年におよぶ佐伯さんのおつきあいを振り返ると、異なる形での出会いが三度あったことに思いあたります。

まず、最初は1955（昭和30）年ごろ、想像力、とくに小説を産み出す想像力をテーマとする、小さな研究会の席でした。佐伯さんは既にアメリカ文学の研究者としても、現代の日本文学を闊達に論じる批評家としても、気鋭の新星と注目される存在でしたから、おのずとグループを主宰する格好になっていました。会合での明快な発言から、新鮮な刺激をあれこれ受けたことが思いだされます。このグループが母胎になって、やがて「批評」という同人雑誌が誕生することになります。佐伯さんはその中心メンバーとして編集に尽力されました。

二度目は1968年、東大教養学部へ赴任してこられたときです。時あたかも全共闘運動のまっただなか、私のほうはしばらく前から勤めていたこともあつて、混沌とした状況をめぐって説明を何度か依頼されたものでした。そんなとき、この先輩は、不可解な事柄を放っておけない理解魔な

のだと、あらためて感じたのを覚えています。顧みてこの教養学部時代が、親密につきあつて頂く機会に最も恵まれていたのは間違いないかもしれません。毎週かならず、昼の休憩時間などに、明快にして含蓄に富む文学談義を拝聴していたのですから。

三度目は佐伯さんが世田谷文学館の館長の職務を退かれ、私があるのを引きつぐことになったときです。1995（平成7）年の開館前から、文学館の創設の準備にも関わられた上で、初代館長に就任されたものの、運営は未開拓の白紙



佐伯彰一名誉館長。
世田谷文学館の初代館長として活躍していたころ。

てジャンルの枠にとらわれることなく、門戸をひろく開いた文学館であること。また地域の文学愛好家の要望と期待に応えるのみならず、新しい愛好家を呼びおこすこと。こうして開館いらい、学芸、総務の両面にわたつて、館員すべての熱心な支持を得て、着々とその方針の実現に取り組まれたにちがいありません。世田谷文学館の基礎を鞏固に築きあげ、世田谷文学館ならではの独自のさまざまな事業が、順調に軌道に乗ることになったのは、佐伯館長の能力が余すところなく発揮されたからだと強調しても、決して過言にはならないはずです。

佐伯館長のあとを引きついだ後任として、もうひとつ忘れられないことがあります。館員諸氏の創意工夫を尊重して、それにできる限り協力を惜しまないようにするのが、館長としてまず肝心な職務だという助言が、それです。佐伯さんの望まれたとおりに実行できているかどうか、正直なところ心許ないものがありますが、これが重要な職務心得であり、後任者への体験にもとづいた貴重な助言であつたことが、いま切実に思いかえされます。

海外の文学と日本の文学とのあいだに無用な境界を立てず、文学そのものとして享受し理解する努力がまず必要であると考え点において、佐伯さんは信頼できる先導者でした。それは最初に面識を得たときから、変ることなくつづきました。その間、2007（平成19）年から以後、文学館という文化施設の果たすべき役割と使命についても、仰ぎみる模範とでもいうべき先任者という面が加えられることになりました。もうひと



「世田谷文学館ニュース」創刊号の館長対談は青野聡さん（右）と。（1995年）

「金曜日の本」出版案内

一人で図書館へ行き、一人で本棚を探り、誰かに薦められたとか話題になっているとか、そういうことに関係なく、一人で本を選んで一人で静かに読む。あの幸福な読書。金曜日の夕方に本を抱えて帰るとき、あの孤独と愉しみがひとつになった思い、その思いを未来にいたるだろう自分のような読者に手渡したい。

吉田篤弘『おるもすと』の話のつづき

（『おるもすと』付録小冊子）より

開館20周年記念企画の最後を飾る、「金曜日の本」が完成しました。

「金曜日の本」は、一昨年当館で個展を開催したクラフト・エヴィング商會（吉田篤弘・吉田浩美）による新たな試みであり、本との接し方の原点に立ち返ることを主眼とした企画です。

当館の活動趣旨とも重なり合う、この「金曜日の本」という概念を具体化するため、本とレコードを出版しました。

本は、著者が12年間あたため続けてきた小説です。ひと文字ひと文字活字を組んで、昔ながらの活版印刷でつくりました。

レコードは、短編2作と架空のラジオCM（いずれも吉田篤弘著）を、女優の中嶋朋子さんと俳優の三上哲さんに朗読していただきました。声で紡がれる物語をお愉しみください。

デジタルの時代に逆行するような形態ですが、その手ざわりや質感も含め、週末のひと時、読書の喜びの原体験に思いを馳せていただければ幸いです。

なお、いずれも数量限定のため、当館のみで販売しております。



『おるもすと』著・吉田篤弘
B6判変型/72ページ
1,600円（税込） 1,400冊限定

『天使も怪物も笑う夜』
作・クラフト・エヴィング商會
LP/両面合計約60分/CD付
収録内容
A1「窮鼠、夜を往く」
（声・中嶋朋子）
B1「天国の探偵——ラジオ・スポットa」
（声・三上哲）
B2「針がとぶ」
（声・中嶋朋子）
B3「天国の探偵——ラジオ・スポットb」
（声・三上哲）
2,000円（税込） 500枚限定

平成27年度世田谷文学賞

5部門で募集を行い、378人から作品が寄せられ、次の方々が入賞されました。

応募者の最高齢は95歳、最年少は11歳でした。

入賞者の作品は「文芸せたがや」第33号に掲載しています。

◎ 短歌（応募者58人）	◎ 俳句（応募者94人）	◎ 川柳（応募者90人）	◎ 詩（応募者77人）
一席 野上 卓	一席 垣田照子	一席 岩崎能楽	一席 （応募者77人）
二席 中里正樹	二席 山宮有為子	二席 海道かつ代	一席 嵯峨実果子
三席 田村敦子	三席 弓削一江	三席 内田恵子	二席 木庭撫子
三席 北條忠政	三席 佐藤洋子	三席 日野原恵美子	三席 花潜 幸
秀作 桑原謙一	秀作 杉田博之	秀作 村田 房	三席 駱駝一間
秀作 松坂わかこ	秀作 丹羽 功	秀作 田中睦女	秀作 堀内敦子
			秀作 水谷有美
			◎ 随筆（応募者59人）
			一席 稲葉篤史
			二席 松井国央
			三席 尾上貴洋
			三席 岡崎正則



平成27年度世田谷文学賞入賞者決定
『文芸せたがや』第33号・世田谷文学館開館20周年記念誌刊行

このたび、本年度の第33回世田谷文学賞の入賞作品掲載誌と、世田谷文学館開館20周年記念誌を1冊に合わせ刊行いたしました（A5変形／128頁、非売品）。

「文芸せたがや」パートは5部門の上位入受賞作のほか、各部門の全選考委員による総評、選評、当館館長による受賞作解説も入り、読み応え十分です。

「開館20周年記念誌」パートは、2011年3月に刊行された『世田谷文学館開館15周年記念誌』の後続誌として、主に2010年度から5年間の活動を中心に、当館の20年間のあゆみをご紹介します。本冊子は頒布いたしません、当館ライブラリー、世田谷区立図書館などでお読いただけます。

つぜひ書きさえねばならないのは、佐伯さんは文学談義の名手であつたことです。あれほど文学を語ることを楽しみ、幅ひろく文学の魅力を味得する術を披瀝するのには熱意を注いだ人物に、私は出会つたことがあります。そういうありし日の姿を思い浮かべると、埒もない空想と承知しながらも、幽明を異にする遠い世界で、生前の知友を見つけては佐伯さんが文学を語る情景を想像して、ご冥福を祈るよすがとしたい気分が、油然と湧いてくるのを抑えきれなくなりました。そして最後に諸々の思いを込めて、永年のご厚誼に心から謝意を申し述べさせていただきます。

2016（平成28）年2月

世田谷文学館初代館長・世田谷文学館名誉館長の佐伯彰二氏が2016年1月1日に永眠されました。館員一同、心より哀悼の意を表します。

上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展

4月23日(土)～7月3日(日)

国際アンデルセン賞受賞作家・上橋菜穂子さん初の大規模展です。1989年のデビュー後、『精霊の守り人』『獣の奏者』『鹿の王』などのベストセラーを世に送り続ける作家は、創作においてはプロットを作らず、自らの内なる〈羅針盤〉の動きに合わせるようにして壮大な物語を紡いでいきます。本展は、代表作〈精霊の守り人〉シリーズに描かれる多文化共生を軸として、関連資料や最新映像技術による体験型展示で、その卓越した物語世界に触れる絶好の機会となります。どうぞお見逃しなく！

＊本紙では、展覧会のために収録した特別インタビューから、2016年春よりNHKの大河ファンタジーとしてドラマ化された作品の舞台裏についてのお話などを抜粋してご紹介します。



▼上橋菜穂子さんインタビュー
聞き手・瀧晴巳さん(フリーライター)

ドラマ化にあたって

上橋 ▼ドラマやアニメをつくる時、私は積極的に制作に関わらせていただいています。私の頭の中にしかない世界を具体的に表現するのはスタッフにとつて、本当に大変な作業ですから、イメージのすり合わせが大切になるので。
今回はとても大きな企画で、『精霊の守り人』から『天と地の守り人』、さらには外伝で書いている『流れ行く者』や『炎路を行く者』の内容を全て含み込みながら、全22話の映像作品を3年かけて放送します。どのエピソードをどういう配分で、どんな構成にしていけば、ドラマとしてより面白くなるかを考えるのは、とても難しい作業です。でも、番組制作側の方々と、よいものをつくりたいという気持ちが一貫していて、幸せです。ストーリー構成を考えると、ところから話し合わせていただいていますから、私にとつても良い勉強になっています。

文字の物語と、ドラマの違い

上橋 ▼制作側と話し合ううちに、文字で書いた物語とテレビで見るドラマは、表現方法が本当に違うのだなあと実感しました。見せ方が全く違うものですから、原作そのままにいうことに固執するとドラマの命を損なってしまうかねない。一番大切な物語の魂となるものだけは大切にしたいけれど、それ以外は、たとえ原作を読んでいる人たちでも、次はどうなるか分からない気持ちでご覧いただく方が遙かに面白いと思いました。

綾瀬はるかさんがバルサであり、小林颯君がチャグムであり、そういう人たちが演じる生きたバルサ、生きたチャグムがドラマを動かしていく変化を大切にしていきたいとも思いました。
最も大きく変化したのは、『闇の守り人』の〈位置〉です。原作の『精霊の守り人』から『天と地の守り人』までを〈チャグムの物語〉として見ると、とても分かりやすいストーリーなのです。1本、綺麗に線が通っている。しかし、チャグムのラインで描いてしまうと、主人公としてのバルサの心の結末の描き方が難しくなるんですよ。原作の場合にはバルサの心の葛藤の一番大きなところは、2作目の『闇の守り人』でかなり決着がつい



〈守り人〉シリーズ全12巻、偕成社/挿画:二木真希子、佐竹美保

腕の立つ女用心棒・バルサは、ふとしたことから新ヨロ帝国の皇子チャグムを命がけで守ることになる。チャグムは父である帝の放った追手だけでなく、ある理由から異界の怪物にも狙われていた。さまざまな背景を持つ登場人物たちの織りなす物語は、シリーズを通して周辺国にも広がりを見せ、壮大な歴史絵巻として立ち上がってくる。

女用心棒・バルサに魅せられて

上橋 ▼強さにもさまざまな側面があつて、私は本当にバルサが好きなのですが、バルサの強さの根源には〈経験〉があるような気がします。彼女はこうならざるを得なかった女性なのです。さまざまな経験が血肉となり彼女を助け、恐らくその経験は彼女にとつて決して心地いいものではなかった。本当につらい人生から得た力だった。それがある時、自分よりもずっと幼い男の子が大変な危機に陥っている状況の中で、その子を助ける力に変わっていく。その時にバルサが救われる部分があるだろう。

成長は多分、一人でするものではない。さまざまな人たちと出会って、さまざまな葛藤があり、経験があり、大人と子どもが触れ合いながら引き出されてくるものではないかと思います。しかも、それは自分だけのことで決してなくて、成長したあかつきには、自分が得られたことは必ず他者を助ける何かに変わる可能性がある。私はバルサの姿を追いつながら、そんなことを考えていました。バルサの生きざまを描いていたとき、私は本当に幸せでした。



NHK大河ファンタジー「精霊の守り人」 ドラマイメージボード(制作:丹治匠)

▼上橋菜穂子 うえはし・なほこ

作家、川村学園女子大学特任教授。1962年、東京都生まれ。オーストラリアの先住民アボリジニを研究。89年、『精霊の木』で作家デビュー。野間児童文芸新人賞と産経児童出版文化賞、米国図書館協会バチェルダール賞などを受賞した『精霊の守り人』をはじめ、『狐笛のかなた』『獣の奏者』など著書多数。2014年に国際アンデルセン賞作家賞、翌年『鹿の王』で本屋大賞を受賞。16年春より、〈守り人〉シリーズがNHK放送90年大河ファンタジーとしてドラマ化されている(主演:綾瀬はるか)。

＊特別インタビューの全文は、聞き手を務められた瀧晴巳さんの書き下ろしで展覧会図録に掲載します。
＊今回のインタビュー抜粋文は世田谷文学館が作成しました。

展覧会関連イベント

①「上橋菜穂子さんとふれ合うひと時」(仮)

『精霊の守り人』の作者・上橋菜穂子さんと一緒に、物語の世界を旅してみませんか？

講師:上橋菜穂子(作家)
日時:4月23日(土) 16:30～17:30
対象:一般150名(事前申込制)
会場:世田谷文学館文学サロン 参加費:500円(18歳以下は無料)

②「バルサになるさ!」(自然観察員のこぼ)

『精霊の守り人』作中シーンを参考に、現代にも通じるサバイバル技術を、館内で楽しく体験します。

講師:須藤正男(CONE指導員)・角銅真実(音楽家)
対象・定員:小学生30名(事前申込制)
日時:5月22日(日) 10:30～15:30
会場:世田谷文学館1階文学サロン 参加費:無料

③「バルサの食卓 対談」(食のこぼ)

「食」に造詣の深いおふたりをお招きして、物語における食事や食文化について大いに語っていただきます。

講師:平松洋子(エッセイスト)、西村淳(「南極」料理人・作家)
日時:6月11日(土) 14:00～15:30
対象:一般150名(事前申込制)
会場:世田谷文学館1階文学サロン 参加費:500円(18歳以下は無料)

④「バルサの食卓 現代編」(猟師のこぼ)

『精霊の守り人』の用心棒・バルサも食べた「干し肉」の作り方や猟の仕方など、生きる力にあふれる「猟師のくらし」を、千松さんにうかがいます。

講師:千松信也(猟師・作家)
日時:6月12日(日) 14:00～15:30
対象・定員:どなたでも(小学生以上)150名(事前申込制)
会場:世田谷文学館1階文学サロン 参加費:無料

⑤「春ボラ 用心棒(ボランティアスタッフ)募集中!」

展覧会会期中に開催されるイベントのボランティアスタッフを募集します。講座の事前準備や当日の講師のご案内、会場整理などを無事遂行させる“用心棒”として一緒に活動を盛り上げましょう!

対象:中学生・高校生・大学生(事前登録制)
その他:参加費無料
＊この催事のみ、日時内容等の
詳細・申込・打合は、以下のアドレス
[kodomom@setabun.or.jp]でお問い合わせください。

⑥「申込方法」

各イベント開催日の2週間前(必着)までに、往復ハガキ(各イベントにつき1枚)に
① 講座名 ② 参加希望者の名前(連名可)
③ 代表者の住所と電話番号を明記のうえ、〒157-0062 東京都世田谷区南島山1-10-10 世田谷文学館「上橋菜穂子展イベント係」までお申し込みください。



バルサになるさ! (イメージ)

企画展

上橋菜穂子とく精霊の守り人展

4月23日(土)～7月3日(日)
2階展示室

観覧料

一般800(640)円
65歳以上・高校・大学生600(480)円
障害者手帳をお持ちの方400(320)円
中学生以下無料
＊()内は20名以上の団体料金
＊初日の4月23日(土)は開館記念、
6月4日(土)は烏山下町まつりにより
観覧無料
＊4月29日(金・祝)は65歳以上無料

『精霊の守り人』1996年 偕成社



生誕100年 映画監督・小林正樹

7月16日(土)～9月15日(木)
2階展示室

観覧料:

一般800(640)円
65歳以上・高校・大学生600(480)円
障害者手帳をお持ちの方400(320)円
小・中学生300(240)円
＊()内は20名以上の団体割引
＊7月22日(金)は65歳以上無料



提供:芸游会

企画展

上橋菜穂子とく精霊の守り人展 4月23日(土)～7月3日(日)

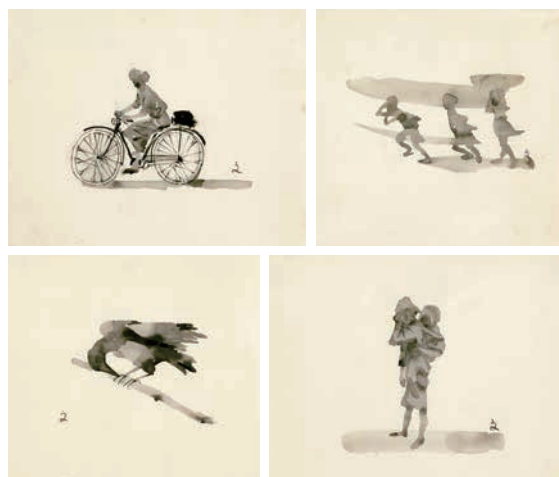
生誕100年 映画監督・小林正樹
7月16日(土)～9月15日(木)

4月	5月	6月	7月
コレクション展 戦後70年と作家たちⅡ ～4月3日(日)		作家たちの戦中・戦後 4月23日(土)～9月15日(木)	

コレクション展

作家たちの戦中・戦後

4月23日(土)～9月15日(木)
1階展示室



堀文子《壺井栄作品集「二十四の瞳」》挿絵(石井立旧蔵) 画用紙・墨・銀泥

観覧料:一般200(160)円 高校・大学生150(120)円
小・中学生100(80)円 65歳以上・障害者100(80)円
＊()内は20名以上の団体料金
＊中学生以下は土・祝・日・夏休み期間は無料
＊障害者手帳をお持ちの方で大学生以下は無料

休館日:

毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌日休館)

全館改修工事による休館:

9月16日～2017年4月21日(予定)

開館時間:

10時～18時
(ただし展覧会入場は
17時30分まで)

交通案内

京王線「芦花公園」駅
南口より徒歩5分
小田急線「千歳船橋」駅
より京王バス(千歳烏山
駅行)利用「芦花恒春園」
下車徒歩5分



公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10

Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120

ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

せたがや文化財団の催し物

■世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]

- 「竹中工務店400年の夢
一時をきぎむ建築の文化史」展
4月23日(土)～6月19日(日)



林忠彦《東京タワー建設》1958(昭和33)年

- アルバレス・プラボ写真展
—メキシコ、静かなる光と時
7月2日(土)～8月28日(日)

ミュージアム コレクションI

- アーティスト・コロニー・セタガヤ
—「白と黒の会」、「砦人会」、
「自由が丘文化人会」
4月9日(土)～7月10日(日)



「白と黒の会」集合写真 1955年

■世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

[Tel. 03-5450-9581]

- 向井潤吉 水辺の情景
4月2日(土)～7月24日(日)

■世田谷美術館分館

清川泰次記念ギャラリー

[Tel. 03-3416-1202]

- 新収蔵作品を中心にI 清川泰次
地中海、アジアの旅から
4月2日(土)～7月24日(日)

■世田谷美術館分館

宮本三郎記念美術館

[Tel. 03-5483-3836]

- 宮本三郎の青春—その戦中までの歩み
4月2日(土)～7月24日(日)

■世田谷文化生活情報センター

世田谷パブリックシアター

[Tel. 03-5432-1515]

●『マクベス』

原作:ウィリアム・シェイクスピア
翻訳:河合祥一郎
構成・演出・出演:野村萬斎
音楽監修:藤原道山
出演:鈴木砂羽 小林桂太
高田恵篤 福士恵二
6月15日(水)～6月22日(水)
世田谷パブリックシアター



撮影:澁谷征司

●『レディエント・バーミン』

作:フィリップ・リドリ
演出:白井晃 翻訳:小宮山智津子
出演:高橋一生 吉高由里子 キムラ緑子
7月12日(火)～31日(日)
シアタートラム

■世田谷文化生活情報センター

生活工房

[Tel. 03-5432-1543]

- いぬと、ねこと、わたしの防災
「いっしょに逃げていいのかな?」展
4月23日(土)
～5月22日(日)
＊無休

生活工房
ギャラリー

絵:七字由布



●DAYS JAPAN 写真展 2016

地球の上に生きる
「世界の未来をつくるために」
5月28日(土)～6月19日(日)＊月曜休み
ワークショップルームB、生活工房ギャラリー

■世田谷文化生活情報センター

音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

●ピアノと語りでつづる音楽紙芝居

出演:音の台所(構成・イラスト・語り)、
川津直子(ピアノ)
6月5日(日) 15時開演
北沢タウンホール

●本條秀太郎

日本の音 式

出演:本條秀太郎、
本條秀五郎(三味線・唄)他
6月18日(土) 17時開演
北沢タウンホール



本條秀太郎